

レバノンでの 救援活動報告

A M D A

イスラエル軍の攻撃により、大量の避難民が発生したレバノンで緊急救援活動を行ったアジア医師連絡協議会（AMDA）の医療救援チームが八日までに帰国し、岡山市檜津のAMDA本部で記者会見した。

医療救援チームは先月二

十四日に日本を出発。首都ベイルートで医療活動を行い、携行した医薬品を現地赤十字に寄贈した。同二十七日のイスラエル軍とイスラム武装組織ヒズボラの停戦後、被害の最も大きかったレバノン南部に入り、赤十字職員らと避難民約四百人を診療した。

較的安定しているが、レバノン南部では爆撃のショックなどで耳鳴りやめまいを訴える人が多かった」と報告した。

菅波代表は、今回の救援活動の意義として「輸送、通信、安全確保などの分野で、現地の日本大使館や外務、厚生両省の協力を得られたことが大きい」と強調。「スムーズで効果的な救援活動のため、今後も政府機関との連携を深めていきたい」と話した。



レバノンでの活動内容などを報告するAMDA医療救援チームの松浦医師（右から2人目）ら＝岡山市檜津、AMDA本部

会見には医療救援チームの松浦多賀雄医師（三）、岩本功医師（五）、清水美恵子看護婦（三）の三人と、菅波茂AMDA代表が出席。松浦医師は「停戦により現地は比